～IF～転生してＧＳ

雨風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～ＩＦ～転生してＧＳ

【Ｎコード】
Ｎ６０８０Ｘ

【作者名】
雨風

【あらすじ】
これはＩＦの物語…
あの事務所にもう一人助手がいた。その男は横島同様にある力を持っていた…
その力を狙って運命はどう変わっていくのかそれは神のみぞ知る？

プロローグ（前書き）

新しく作品を書いてみました！

後書きに今後の予定を載せたので暇があれば見てください。

プロローグ

ある世界から転生した…

その世界には仲間がいた

一人は万能な霊能力者の所長

二人目は……うん、なんというか…幸先があまりなさそうな男だけど色々としぶとい。

そして三人目が…生まれた時から運命がわかっていた一人の男?

いや主人公であった。

これはある世界から転生し、強力な霊能力を身につけ様々な事件を解決していく物語である…

「ところで俺だけ悲しい事言われてないっスか？」

「あら、事実じゃない幸先がないことは」

「だな、大抵はオチ扱いだし」

「うぅぅ、いつか絶対に見返したるぅー！」

「くると良いわね？その日が」

「頑張れよ！！」

プロローグ（後書き）

バカテスを考えているときにこの作品も書いてみたいと思い、書いてみました。
この作品はバカテスがある程度まで出来るまでは不定期更新にしようと思います。
それでは雨風でした

幼少期編第一話（前書き）

第一話が完成したので投稿します！

幼少期編第一話

突然だったんだ。

いつもの学校の授業が終わり、下校中の時だった…

トラックにひかれそうになった女の子を庇って変わりに自分がひかれたんだ。

それで全身打撲、おまけに頭から地面に叩きつけられたから即死だったらしい…

何故そんな事を知っているかだって？

それはね……

「目の前に庇った女の子がいたからだよ」

「？、誰にいっているのですか？」

「ん？、いやコッチの話だよ」

「そうですか…それでは先ほどの説明を続けますね」

「ああ」

彼女曰わく本来俺はあそこで死ぬのではなく、寿命で死ぬはずだったらしい…

しかもその彼女こそ、俺がいた世界を観測していた天界の使いだったらしいのだ。

だからこそ、その世界でおきる全ての運命を彼女は知っていたのだ…がしかし、

「俺が死んだ事で、今後起きる出来事に亀裂ができたと」

「は、はい。大変申し訳ないのですがその通りです」

そう、偶然だったのだ。たまには観測するだけではなくその世界に入り、体験する事も仕事の一つだったのだ。

が、少しよそ見をした結果死ぬ予定に入っていない人間が死んでしまった。

という事である。なので死んでしまった後どうするかを話し合っているのだ。

「あなたには二つの選択を決められます」

一つ目…このまま天界にいき、そこで新しい転生先が見つかるまでゆっくり休む。

二つ目…天界にいくのではなく別世界、つまりは平行世界に転生する事。その時は彼女がいろいろと力を貸してくれるらしい。

この二つの選択だ

「今いる世界に戻るのは無理と？」

「戻る事は出来ますが残念ながらその時は寿命がくるまで目覚めません」

理由は頭を強く打った事による植物状態

全身打撲だけですんだだけでも嬉しい事だったが目を覚ます事はない…

だが悲しい事だけじゃなかった。

「どういうわけか、あなたから凄まじい霊力がわき出ているんですよ」

「れ、霊力？」

そう、頭を強く打った事により本来開花する事がなかった潜在能力が覚醒したのだ。

「それでどうしますか？　天界に行くのなら私が案内しますが」

「…平行世界に行くとして、どういう世界に行けるんだ？」

「それはあなた次第ですが行くとするならば…」

「ほんじゃそこはワイらにまかせてくれないやろか？」

「うん、私たちにね？」

「ッ！？　あ、あなた方は」

「？、どっかでみたような…」

突然二人？の男が現れた。

「勝手ながら失礼だけどね、私達が選んだ世界に行ってくれないだろうか？」

「せやせや、その時はワイらも力をかすさかい」

ふむ……どこかで見たような気がするが…

「わかった、あなた方が選んだ世界に行くよ」

「ありがとう！それじゃあどんな力が欲しいんだい？大抵の力なら与えられるよ」

「といっても流石にワイらみたいな力は無理やけどな」

「またあなたの姿、身体能力も変えられます」

なるほど…それならば

「とあるマンガの能力なんだが……がいいな。後は、修行場があれば修行するから」

「へぇ～面白い能力を選んだね」

「修行場の事は安心しや。あっちの方が大歓迎やしな」

「姿はそうだな…今のままでいいや、ただ身体能力は少し上げてほしいね」

「はい分かりました、　……あれ？」

「どうしたんだ？」

何か不具合でもあったかな？

「い、いえ何でもありません。他にはないのですか？ないのならこ

れで終わりますが」

……。

「……他にあるみたいだね？」

「ああひとつだけ…」

「そのひとつとは何なんや？」

「俺が予想した世界に行くのなら、……の力を使えるようにしたい。できるか？」

「「「ッ！？」」」

二人の男？は驚愕して女の子の方はやっとわかったようだな…

「ああ、できるとも。けど何でなんだい？」

「何ででもさ、俺は困っている奴がいたら絶対助けるからな」

昔から決めていたしな

「……ふむ」

「なるほどなぁ」

「……」

三人はしばらく考えていると…

「ええやろ、ワイらからの選別や」

「うん、君は絶対悪用はしないと思うしね」

どうやら二人はわかってくれたようだ

「決まりましたね、それでは始めますよ」

「ああ、頼むよ」

俺は頷くと彼女は自分の両手を前にだした。

……すると何か神々しい力が集まり渦巻き状の空間がでた。

「この世界に入った時は驚くと思いますが、頑張って下さい！」

「わかった、それじゃあ行ってくるよ」

そう言うと俺は手を前に突き出して渦巻き状の空間に入っていった

……

……。

「よかったのですか？あの力は確か…」
彼がいった後２人の方々に聞いてみた。

「ああいいんだよ、その方がコッチの都合がいいしね」

「……せやな」

「？どうしたのですか、……さま」

何か深刻に考えているようだし聞いてみると。

「さっきの彼、かなり身体能力がよくてな」
それは私も思いました。……けど、

「なぜあんなにも力があるんでしょうか？まるで“初めから”持っていたような気がします」

「ッ！？、そうか…」

……さまは何かに気づいたようだ。

「どうしたん？キーやん」
「いやサっちゃん、これも『運命』かもしれないね。彼があの力を欲しがるのもわかった気がするよ」

「とするとやはり“彼女”を？」

「さ、サっちゃんにキーやん？」

2人は話し合って夢中だが、私は2人のあだ名に驚いていた。

「なるほどな、せやったらもう少し力を与えておけばよかったやろなぁ」

「それは大丈夫でしょ。力の方は嫌でも身につくし…」

「そうなんですか？」

私はひとつの世界しか管理していないから、そこはよくわからないな…

「そうだよ？君もひとつだけではなく複数の世界を管理してみればわかるさ」

「わ、わかりました」

今度から大変になりそうだけど、やってみようかな…

「……願わくば、今度こそ彼には幸せになってほしいね」

「そうや…アイツは傷つきすぎや…」

「……（アイツ？）」

その時の私は、わかっていなかった。

彼をその世界に送ることにより他の世界に脅威がでるほどの大事件が起きてしまう事を……

幼少期編第一話（後書き）

こんな感じに書きました。主人公の力は次の話で書こうと思っています。
それでは！

第二話（前書き）

第二話更新しました！

今回は短めです。

第二話

この世界に送られて二年がたった…

俺、いや「僕」は天崎家の長男として生まれた。

天崎家とは先代から代々続いている退魔師の一族である。その力は様々な妖怪を退ける……らしい

何故らしいのか、その理由は…

「はぁ～いリューちゃんご飯ですよ～」

「リュ～ちゃん、コッチ向いて笑って笑って～」

両親が超がつくくらい親バカだからだ。

赤ん坊の時の記憶は曖昧だったが、控えている使いやメイドさんに詳しく聞いてみると、どうやら僕が生まれた時は両親は喜びで半狂乱して屋敷を半壊してしまったらしい…

今だって母さん、『天崎　要』はものすごい笑顔でご飯を食べさせてくれるし。

父さん、『天崎　光明』は天崎家当主で一族の中心人物のはずなのに…なのに今は馬鹿でかいカメラを構えて僕を連写している

両親曰わく、自分の容易はまるで天使のよう、これを可愛がらないわけがない！！

……正直、少し泣けてきた。

こんな感じで二年すぎた。

今現在やっていることは屋敷の庭で座禅を組み、自身の霊能力を高めている。

…そのかわり周りには相変わらず両親が何かやっているが…

～side母～

う～ん、やっぱり座禅を組んでいる姿も凛々しいわねぇ～。

赤ん坊の時は本当に、本っ当に可愛いかったし、あれから二年たったけれどそれでも可愛いいわぁ～！

さすが我が子！！

…とまぁ冗談はこのくらいにして真面目にリュー君を見てみる。

今現在やっていることは自身の霊力を高める修行の一つ。

「瞑想」なんだけど…凄いわねぇ、ここからでもビリビリとくるわ。
…あの子の霊力が。
やっぱり例の依頼、受けた方がいいわね。
その方が“あの子”にも息子にも将来的にいいし、さっそく『六道家』の夫妻に連絡しなくちゃね♪

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ父～

うむ、さっきから要がにこやかに息子を見つめているが……

やはり例の「緊急」依頼を息子に受けさせる気か…。

確かに霊力はすざましい、だがそれだけでは大ケガするかもしれないな…

仕方ない、ここは一つ私がやるしかないな！

フッフッフ…久しぶりだから血が騒ぐなぁ♪

最初は基礎の術式をやらせないとな！！

……まぁ久しぶりだからウッカリ手加減をぬいてしまいそうだがな…

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

何か妙に寒気がするな……

……今の所霊力を高めとかないと、後々大変な出来事が起こりそうだからな…

それに今できる術式は『結』と『解』のみだし、早く『滅』と『退』を使いこなさいとな…

…そう、僕があの三人から貰った能力は『結界師』に出て来る基本的能力と応用術だ。

あのマンガ通りになるならば自分で張った結界に乗る事ができるし、さらに修行が積めば何重にも結界を張る事もできるし相手の動きだって止められるからだ。

……あともう一つはしばらくは使えないし、使わない方がいいな…後々面倒な事になるし。

…それでも霊力の制御は今のウチから高めておかないとな。

……なんだが命の危険が日に日にたかまっているし。

……お腹減ったな。

～ｓｉｄｅ？？？～

「はいは～い、わかりました～。コッチも大賛成よ～♪」

天崎夫妻から連絡が来たんだけど～、

これは～かなり期待が出来そうだわ～！！

「さっそく～あの子に伝えなきゃね～♪」

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

第二話（後書き）

書いてみてなんですけど…幸先が早くにも終わりそうです♪

……次回作ではもう少し主人公の幸先を延ばそうと思ってます。

次回作ではあの子を出す予定です！！

それでは♪

第三話（前書き）

長らくお待たせしました！！

第三話更新です！！

第三話

……一週間かかりました……「復活」というか「完治」するのに…。

原因は他でもない父さんだ。

座禅修行の二日目あたりに、「基礎術を教えてあげるから道場に来なさい」といわれたので最初は喜んでついて行った…。

でもそれがいけなかった。いきなり中級の式神だすわ、しかもそれを霊力まとった腕のみで倒せとか言うわ、最終的には一体だけいた式神が三体にふえるわ……

全治一週間の怪我ですんでよかったな…

母さんが式神を秒殺（ついでに父さんも撲殺）してくれたおかげだ。

母さん曰わくやり過ぎらしい…

まぁ父さんの事はさておき、僕はあの虐めという名の修行を耐え抜い…いや生き残った？

そのおかげか一通りの能力覚醒ができた。

結界術は一通りできるようになったし、あと何故か霊波刀を出せるようになった。

まぁ出せるだけで切れるかどうかは別なのだが。

そして何故いきなりハードな修行になったか理由がわかった

どうやらあと二週間後あたりに「六道家」に行くらしい…

……何となく嫌な予感がするんだ。

それに母さんが小声で「これで良くなったらいいんだけど…」とか言っていたし。

気を引き締めていかないといけない気がする…

〜二週間後〜

「さぁ竜斗、ここが六道家の屋敷だ。失礼のないようにな」

「うん、わかった」

遂に僕と父さんは六道家の屋敷前に来た。

見た目はデッカいお金持ちの住む屋敷、だけど見るからにここからも霊波がピリピリきている…

「それじゃあ父さんは少し六道夫妻に挨拶とかをしてくるから、竜斗は庭あたりでゆっくりしていなさい」

「…流石に他人の庭でゆっくりはできないよ父さん」

「……そうだな」

偶に父さんは天然なんじゃ?、とか思ってしまう。

「それじゃ式神と一緒ならゆっくりできるだろ?前に契約した式神の中で一体と一緒にいるといい!」

父さんは握り拳をグッと前にだして言ったけど…

「あの式神ってほとんど“戦闘”用じゃなかったっけ?」

「……大丈夫だ、ある程度は問題ないだろ？……多分」

そう…父さんは修行の際、式神契約をするようにと言ってきたのだ。

天崎家では代々、己に控える式神を使役して共に戦ってきたらしい…

そんなわけで父さんも式神を持っている……持っている？

いやあれは使役というより逆に命令されているような…

まぁ父さんの事はさておき、母さんが使役している式神「刀姫」には霊波刀での剣術稽古にお世話になった。

「刀姫」…漢字通りだと（かたなひめ）となるが名前は（とうめ）と呼ぶらしく、最初に間違って呼んだ時はおもいっきり竹刀で殴られた。

ちなみに父さんの使役している式神の名は「朱雀御殿」（すざくごてん）と言う名前だ。

というわけで僕も式神と契約したのだが。

「まぁいいか…とりあえず「影鬼」！」

ブゥン…

「……若君、何用で？」

最初に契約したのがこの「影鬼」（えんき）だ…

名の通り影に潜む鬼というが、見た目は和服を来た武士…

「父さんが庭でゆっくりしていろとか言ってきたから、影の中で護衛お願いしてもいいかな？」

と、僕は小首を傾げて言った。

「ぎょ、御意！！この影鬼精一杯若君の護衛をやらせていただきます！！」

言っている事は嬉しいんだけどさ…鼻血ダラダラだしているし、親指をグッと出している所が全て台無しなんだけど……

「と、とりあえず影の中に入っておいて？」

「御意！！」

ブゥン…

「それじゃ父さん、僕は庭に行って…」
影鬼を影に戻して父さんに顔をむけたのだが…

パシャパシャパシャ
「……ッ！！」
物凄い形相で僕をカメラで撮っていた…
「…父さん？」

「……はっ！？　な、なんだ竜斗？」
気を取りなおしてももう遅いよ…

「…出てきて「外道丸」…」

ブゥン…

「……何用でありんすか？竜斗」
出てきて来たのは黒い和服を来た普通の女の子。
が、頭に角がついているのと片手に長身の金棒を持っているが。

「ちょっと父さんを軽くブチノメしておいてくれないかな？」

すると外道丸はにこやかな顔で答えた。

「了解しやした。この外道丸、精一杯父君をブチノメしやす」

「ちょっ！？さっきとデジャヴだけど明らかにこっちがヤバい！！りゅ竜斗！父さん謝るから外道丸戻してくれない？」

「だけど断るよ父さん」

「即答ですか！？」

明らかに焦っている父さん。

まぁそりゃそうだ、何せ相手が外道丸だしね…

「外道丸」は影鬼を使役して間もない時に偶々山菜を採っていた山の祠に封じられていたのだ…

何でも悪さをしすぎたせいで当時の陰陽師に封じ込められたらしい。

なので祠にいてもつまんないから式神契約して下界に連れてってほしいと頼まれたので契約したのだ。

今のところ悪さはしてないので普通に使役しているが…
とりあえず性格はかなりのドSとわかった。
「フフフ…久々に血を見るやもしれやせんね」
「くっやられてたまるか！？　「朱雀御殿」！！」
シュン
「ん？…何か用？」
ちょうどお昼ご飯だったらしくテーブルとイスと一緒に出てきた。
「あら外道丸じゃない？これから私お昼なんだけど一緒にどう？」
どうやら今回は中華のようだ。
「いいんでありんすか？　それじゃ父君をブチノメしたら馳走になりやす」
ヨダレを出しながら外道丸は言った。
「ちょっ朱雀！？私を助けるんじゃないのか！？」
汗をダラダラ出しながら朱雀御殿に聞いている父さん。

「え～何で私が？それに影の中で見ていたけど明らかに光明の自業自得じゃない」

どうやら助ける気はないようだ。

「それでは父君、お覚悟を…大丈夫でありんす。最初だけが痛いだけやすんで」

「その最初で死ぬわ！？くそっ息子の成長を見届けるまで死ねるかぁぁぁ！！」

ダダダダダ…

「む？逃げやしたね、逃がしやせんよ！！」

ヒュバッ！！

「……」

父さんは走るのに対して外道丸は飛んでいるし…終わったか。

「それじゃ朱雀さん僕はこれで」

「はいは～い、またね～」

ポフン

朱雀さんと別れて僕は庭に向かう事にした。

～side？？？～

クスン…お母様はひどいわ～私だって好きで暴走したくないのに～！！

でも……自分で分かっていてもみんなを抑える事は難しいし～
それに幽霊だって怖い時は怖いわ～そのせいで癇癪をおこしちゃうし～……

どうしたらいいんだろ～……。

「どうしたの君？こんな所で…」

「ふぇ…？」
そんな時だったの～
目の前に男の子が現れたのは～！！

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ竜斗～

此処はかなり広いなぁ…

庭というより小さな公園にいるようだよ

「それにしても父さんは何でいきなり六道家に呼ばれたんだろう…」

何か用事でもあったのかな？

それなら僕を一緒につれて行く理由がわからないや。

「……？　あれ、あの子は…？」

理由を考えながら歩いていると、丁度花畑の真ん中あたりに女の子が一人座っていた…どうやら泣いているようだ。

「どうしたの君？こんな所で…」

「ふぇ…？」

その子は涙で目元を赤くしていた。

「どうして泣いていたの？」

「…お母様にぃ～怒られちゃたのぉ～。だからそれが悲しくてぇ～、でもねぇ～私は泣いちゃいけないのよぉ～」

「泣いちゃダメ？何で泣いちゃいけないの？」

僕は首を傾げた。何で泣いちゃダメなんだろう？

「私の影の中にねぇ～皆がいるから～泣けないのよぉ～！、泣いちゃうと～皆がぁ～暴走しちゃうからなのぉ～」

ふ～ん大体分かった気がする。何で泣いていたかが…

「…それなら少しずつ泣くのはどうかな？僕も此処にいるからさ」

この子は何となく最初の頃の僕に似ている。修行の時にくじけそうになったあの時の僕に…

「で、でもぉ～本当に危ないのよぉ～？」

涙でグショグショになりながら僕に聞いてくる。
僕はなるべく優しくその子の頭を撫でながら言った。
「大丈夫だよ。少しずつ泣けばいいんだ、我慢は体によくないよ？」
昔母さんがしてくれたみたいに優しく撫でた…すると我慢の限界だったのか僕に抱きついて少しずつ泣きだした。
「うぅぅ…ふぇぇえ…」
その子が泣いている間、僕はゆっくり背中をさすっていた…
日が傾きはじめた頃にその子は泣きやんだ。だいぶよくなったようで笑顔になっていた。
「本当にぃ～ありがとうねぇ～！」
「いいよ、僕はただ泣いている君を助けたかっただけだからさ」
僕も笑顔で言った時だった。突然彼女の影から一匹の犬がでてきた。
クゥ～ン
「ん？どうしたんだおまえ、僕にようかい？」

僕の足元にすり寄ってきたので抱き上げながら聞いた。

バウ、バウ！
ピチャピチャ

「ははははっくすぐったいよぉ」

するとその犬は顔を舐めてきたので少し驚いていると、女の子はそれにビックリしたようで目を丸くしていた。

「すご～い！ショウトラちゃんが私以外に懐くなんて～！！」

どうやらこの犬の名前のようだ

そしてそれが引き金となったのか彼女の影から様々な生物がでてきて僕にじゃれついてきた。

キィィ♪　グギャギャ！

ヒヒーン！　クルル…

「あは、あはははは♪　くすぐったいよ皆！！」

「ふぅわ～みんなもうあなたの事ぉ～気に入ったみたいね～♪」

しばらく皆と遊んでいたけど、大事な事に気が付いて皆に離れてもらった。

「忘れてた、僕の名前は竜斗！「天崎竜斗」ていうんだ♪君の名前は？」

すると彼女は笑顔で答えた。

「私のぉ～名前はねぇ～！「六道冥子」っていうのぉ～！よろしくねぇ～♪」

お互いに自己紹介をした後僕たちは、冥子ちゃんの式神たちと一緒に遊んでいた。

…ところでいい加減外道丸帰ってこないかな？

～　ｓｉｄｅｏｕｔ～

～六道家応接室～

困ったわ～！あの子ったらいったいどこに行ったのかしら～！もうお客様が来ているのに～！！

「やっぱり～少しキツく叱りすぎたかしら～？」

少し悩んでいるとメイド長であるフミさんが慌てて入ってきた。

「どうしたの～？慌てて入って来たけど～、もしかして冥子が見つかったのかしら～？」

「は、はい！冥子様が帰ってこられましたよ！その事に一つ報告がありまして…」

普段は冷静かつ優雅な事が売りのフミさんが慌てていたのだ。何かとんでもない事に違いないわ～…

ま、まさか！？

「も、もしかして～！冥子がまたプッツンしちゃったりしたのかしら～？」

嫌な予感がしたのでフミさんに聞いてみたが、どうやら違うらしく首を横にふり応えてくれた。

「いえ、何かこう悩み事がスッキリ消えたみたいに凄い笑顔で帰って来たのですよ。あんな笑顔は久しぶりに見ました」

え、えぇ～！！あの子が笑顔になっていた？それは一体…

「そういえば～冥子はぁ～一人で帰ってきたの～？」

「あ！そうでした！奥様、冥子様のとなりに男の子が…男の子（？）が一人いましたよ」

それはやっぱり～あの人の息子さんね～！

「うふふ～やっぱりあの人に依頼して正解だったわ～♪」

「そういえば奥様、天崎様とはどんな関係だったのですか？」

あの人との関係～？そうね～しいていうならば～♪

「昔ながらの～幼なじみで～♪そしてね～」

私の初恋の彼だったのよ♪

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～おまけ～

ハァハァハァ、こ、此処までくれば安心だな…

「まったく我が息子には困ったものだ。少しぐらいカメラに収めたってよいではないか…」

最近になってカメラに撮られるのを嫌がるようになったな…何故な

のだ？※

※本人は気づいてないようだが、撮り方が異常になっているため嫌がっているのだＢｙ作者

「おや？此処にいやしたか父君よ」

「ゲッ！？見つかったか！！」

「朱雀殿からのお誘いもありやすから、手短に終わらせやすよ」

スチャ！

「ま、まて！！話し合おうじゃないか！？」

マズいマズい非常にマズいぞッ！？

「だが断りやすよ」

「貴様もかぁーー！？」

ギャアアアァァ…

その日、六道家のどこかので絶叫が聞こえた（笑）

第三話（後書き）

いやぁ～本当にスミマセン；

文才がわかなかったのもあるし、忙しかったのです…

それでやっと学校が終わって冬休みに入ったのでこれからは少しは…早くできるかもしれません。

それでは気を取り直して次回予告です！！

次回は少し六道家の話をした後に、もう一人の原作人物に会います！！

それでは雨風でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6080x/

～IF～転生してＧＳ

2011年12月24日10時48分発行